

第 102 回 歴史リレー講座「名奉行と奈良の宝物」 森下 恵介氏 (R5.3.19)

奈良の文化財といえば、古代のものが中心になりますが、それらを人々がどのように見て、どのようにして残されてきたのかを考えるのは非常に大切なことです。人気の高い興福寺の阿修羅像など明治以降に美術彫刻として評価されるまでは怖い仏様であり、路傍にあるお地藏さんや村のお寺にある阿弥陀さんなどがやさしく救ってくださるご利益ある仏様と思われていました。こうした大和の文化財が、落語の「鹿政談」でも知られる名奉行川路聖謨（^{かわじとしあきら}1801～1868）の目にはどのように映ったのか見てみたいと思います。

奈良の町は江戸時代、幕府領（天領）でした。現在の奈良女子大学のところに奈良奉行所がありました。発掘調査で堀跡からたくさんの奉行所の遺物も出土しています。川路は幕末の弘化 3 年（1846）に奈良へ着任しました。彼は約 5 年間の奈良在任中に綴った日記『寧府紀事』を残しています。奈良奉行所については「いかにもきたなき田舎寺のごとき御役所也」と書いています。奈良奉行所は大坂、京都や堺などの奉行所よりも規模が大きく、慶長 19 年（1614）の大坂冬の陣の際には徳川家康の宿所となっています。奈良奉行所は大阪包圍網として築かれた方形単郭の「城」としての性格をもっていたとも考えられます。奈良奉行の職務には大和一国の寺社支配があり、奉行は着任後一年以内に寺社巡見するのが慣例化されていました。奉行が巡見する場所、見るべき宝物は決まっており、これを着任ごとに確認するのが公務であったといえます。いわばこれが江戸時代の古物、宝物（現在の「文化財」）の保存手段と言え、保存すべき価値は公儀（幕府）が認定していたと言えます。

川路の巡見は着任後の弘化 3 年（1846）4 月 9 日の興福寺・春日社・東大寺から始まり、この年に奈良周辺と生駒、法隆寺の巡見を終え、嘉永元年（1848）の 3 月 12 日から 16 日には長谷・多武峰・吉野・飛鳥・久米寺などを巡見しています。『寧府紀事』には奈良の社寺で見た宝物についての感想を記しており、幕末の価値観の一端を知ることができます。川路の価値観は近代的、合理的であり、材質・制作技術・希少性・時期・保存状態など近代的価値観に通じるものがあり、合理的な価値観で評価しており、「彫り方絶妙」「驚くべきもの」「巡見時にみせるべき永世の重器」と評価していますが、伝承や俗信によるものは「^{くだん}例の古仏あるばかり」「驚くべきものあらず」「銭にならぬ仏ばかり」と厳しい評価をしています。

川路の好む「^{みやび}雅と質朴」は徳川家への忠と尊王に通じ、儒教的合理主義と廃仏論（仏法嫌い）は明治初年の神仏分離や廃仏につながり、合理的価値観は明治の古器旧物保存につながるものといえます。川路は「日本書紀之年月といふものは甚だ以て疑うこと多し」と言っており、「奈良の鹿」についても「石子つめ 首きるといふのは 戦国以前のことなるを…」「角きりの時は鹿の死しても構わぬ也」とさえ言っています。また、古物骨董については「我、古を好み古物を見れども古物は嫌い也 多くは墓中のけがれもの」としています。川路は嘉永 4 年（1851）5 月に江戸帰還の命を受けますが、その直前の 2 月 4 日に成務天皇陵、垂仁天皇陵、称徳天皇陵（現在の神功皇后陵）を盗掘犯たちを捕縛します。江戸時代に盗掘犯が捕縛された例は他にありません。この事件と川路の復命をきっかけに幕末の激動期に「安政の陵墓改め」が実施され、神武天皇陵の治定や「文久の修陵」が行われることにもなります。以後、山陵・陵墓が政治的に利用され、川路の意図とは異なり、これは天皇制を正当化、徳川支配の否定に利用されていくことにもつながっていきます。川路の大坂町奉行（東町）に転任後、後任の奈良奉行は落語の「^{さば}佐々木裁き」で知られる名奉行佐々木信濃守^{あきのぶ}顕発でした。川路は安政元（1854）年ロシア使節ブチャーチンと北方領土確定交渉し、国境を定め、安政 5（1858）年の「安政の大獄」で^{いんきよさしひかえ}隠居差控となり、慶応 4 年（1868）3 月 15 日、新政府軍による江戸城総攻撃を前に割腹の上ピストルで喉を撃ち抜き、滅びゆく徳川幕府に殉じて自害します。享年 68 歳でした。